

ADHD特性が大学生の進路決定におよぼす影響

—大学生生活上の困難を媒介として—

目白大学心理学研究科 篠田 直子
目白大学人間学部心理カウンセリング学科 沢崎 達夫

【要 約】

本研究の目的は、セルフレポートによって把握される「不注意」や「多動性・衝動性」の自覚であるADHD特性と大学生生活上の困難および進路決定との関連を明らかにすることであった。大学3年生235名を対象に、ADHD特性、大学生生活上の困難、進路決定からなる質問紙を実施した。大学生生活上の困難は、スキル不足である「プランニングの弱さ」、「行動抑止の困難」と情緒の問題である「不安」の3因子、進路決定は、「回避」、「焦燥」、「模索」、「決定」の4因子で構成されていた。構造方程式モデルによって、ADHD特性、大学生生活上の困難、進路決定の関連を検討した結果、「回避」は「不注意」から直接正の、「焦燥」や「模索」は、ADHD特性やADHDによるスキル不足から生起する「不安」から正の、「決定」は「不注意」に起因する「プランニングの弱さ」から負の影響を受けており、弱いながらも「不注意」は、直接的または間接的に進路決定を阻害する可能性が示唆された。

キーワード：ADHD特性、大学生生活上の困難、大学生、進路決定

I. 問題と目的

大学はユニバーサル化を迎え、大学に在籍する発達障害のある学生は急増している。大学における障害学生に対する発達障害学生の割合は、統計を取り始めた2007年の2.8%から年々増加し、2013年度には16.4%に達した（独立行政法人日本学生支援機構、2014）。この実態を受け設置された「障がいのある学生の修学支援に関する検討会」の報告（文部科学省、2012）、さらに2013年の「障害者の権利に関する条約」の批准によって、大学における発達障害を含めた障害者が平等に高等教育一般の機会を与えられる支援体制の準備が急務となっている。

発達障害者支援法に基づき、大学において「発達障害」として支援の対象となっているのは、学習障害、注意欠如多動性障害（Attention Deficit - Hyperactivity Disorder：ADHD）、広

汎性発達障害等であるが（文部科学省、2005）、ADHDは大学において行動上の問題が重篤化しやすい障害のひとつである。大学生活は、学習や生活、対人関係などさまざまな面で、高校までの学習環境と異なり構造化の程度が低い。そのため、大学生にはある程度の自主性、計画性、自己管理が求められる。しかし、ADHDのある大学生は、体系的な思考や自己抑制の弱さによる行動規範維持の苦手さ（Turnock, Rosen, & Kaminski. 1998）、学習習慣が形成されにくいことによる学習スキルの獲得の遅れ（Norwalk, Norvilitis, & MacLean, 2009）、時間的な見通しのつきにくさ（Prevatt, Lampropoulos, Bowles & Garrett, 2011）など、大学生活に必要な計画性や自己管理、自己抑制など発達的に獲得されるべき種々のスキルの獲得が遅れているため（Barkley & Murphy,

2006), 大学で新たに学習, 対人関係, 社会性などさまざまな点で問題を引き起こすと考えられている。特に, ADHDのある大学生にとって, 進路決定は困難を極める。平成23年度のADHDのある学生の就職率(3月卒業者のうち, 就職者の占める割合)は28.4%と大学生全体の就職率が67.3%であるのに対し非常に低い(Table 1)。また, 進路未決定卒業(学卒無業)や現況不明の学生の割合は, 大学生全体の倍近くであり, ADHDのある大学生にとって進路決定は容易な課題ではないことがわかる。

ADHDのある大学生にとって進路決定が困難である要因のひとつとして, 意思決定力の乏しさがあげられる。進路決定というまでもなく大学生にとって重要な意思決定であるが, ADHDのある大学生は不注意, 多動性, 衝動性といった行動特性によって, また, 二次的に獲得される否定的感情にとらわれることによって意思決定が難しい(Quinn, Ratey & Maitland, 2000 篠田・高橋(監訳), 2011)。ADHDのある大学生は, 衝動性によって問題の明確化や重要な事実をすべて集められない, 他の考えや周りからの刺激に気を散らさずに1つの考えに集中できない, 多くの選択肢に優先順位がつけられないまま圧倒されてしまうなど, 目標の設定, 計画, 実行, 行動選択を適切に行えず, 意図したことを柔軟かつ計画的に行動に移すことができない。その背景には, 前頭前野の実行機能障害が確認されており(Barkley & Murphy, 2006), 神経生物学的な問題を基盤とした

ADHDの行動特性(以下, ADHD特性と略記する)が直接, 意思決定になんらかの影響を与えていることが予想される。また, 幼児期からの失敗経験により“どうせやってもうまいかない”という誤った思考パターンが慢性化しているために, 否定的な感情にとらわれ意思決定できない。否定的な感情は二次障害として抑うつや攻撃性に展開する場合もあり, 情緒のコントロールができないことで問題を憎悪させていると考えられる。このように, ADHD特性および情緒面の特徴は進路決定になんらかのマイナスの影響を与えている可能性がある。

このようなADHDのある大学生の進路未決定を理解するとき, 「成人のADHDに特化した認知行動モデル(Safren, Sprich, Chulvick, & Otto, 2004)」は有用なモデルである。このモデルは, ADHDによる機能障害(日常生活の支障)を, ①神経生物学的なADHD主症状(行動特性)によって, さまざまな行動的対処法である補償方略を有効に活用できないために起きる経路と, ②ADHD主症状による幼少期からの失敗経験の繰り返し为非機能的な認知・信念から抑うつ, 不安, 怒りなどのネガティブな気分状態に展開し, 補償方略を有効に活用できないために起きる経路があり, さらに, ADHDによる機能障害は失敗経験として次のネガティブな感情に結びつくとして説明している。ADHDのある学生の就職の難しさの要因に関して, ADHD特性や現時点での補償方略の活用の問題や失敗体験の繰り返しによるネガティブな気分状態が, 大

Table 1 平成23年度 大学卒業者の進路状況

	卒業者数 (N)	進学	就職	臨床研修 医	専修学校・ 教育訓練等 (%)	一時的な仕 事で就労	左記以外	死亡・不祥
全大学総計 ¹⁾	558,853	11.3	67.3	1.6	1.7	3.0	13.6	1.5
発達障害 合計 ²⁾	657	10.5	27.5	0.3	3.8	8.4	37.1	12.3
ADHD 合計	74	18.9	28.4	1.4	4.1	9.5	20.3	17.6
診断有	28	17.9	17.9	0.0	7.1	17.9	21.4	17.9
診断無	46	19.6	34.8	2.2	2.2	4.3	19.6	17.4

1) 学校基本調査(文部科学省, 2013)より

2) 平成23年度 大学, 短期大学及び高等専門機関における障害のある学生の修学支援に関する実態調査報告書(独立行政法人日本学生支援機構)より

学生の進路決定にどのような影響を与えているのか検討することは、ADHDのある学生のキャリアサポートの上でも重要なものと考えられる。

さて、大学生のADHD特性に焦点をあてた研究では、診断の有無による差を検討する方法と自己評価による行動特性の強さとの関連を検討する方法がある。近年、大学には診断はないが不注意や多動性・衝動性といったADHD特性を抱え支援を必要としている学生が存在しており、ADHDとして配慮を受けている学生の67.8%は診断をうけていない現状がある（独立行政法人日本学生支援機構，2014）。この背景には、DSM-IV-TRでのADHDの診断基準が青年期以降の症状をとらえきれなかったり、前景にある精神障害によって、併存障害もしくは二次性障害として看過されてしまうといった成人のADHD診断の難しさがある。また、障害の知識が乏しく本人も周囲も気づかなかったり、診断によって受ける不利益を心配するあまり、診断をあえて受けないなどADHDの症状がありながら未診断・非診断のまま、支援の枠組みから外れている潜在的なADHD学生が、一定数存在することも指摘されている（Wolf, 2001）。診断のある大学生同様、彼らもまた、大学生活においてさまざまな問題を抱えており、診断がなかったり自分の困難さに気づかないために支援に結びつかず不適応に陥っているケースも少なくない。岡野・高梨・宮下・國井・石川・増子・丹羽（2004）は、ADHDに代表される不注意、多動性、衝動性の行動パターンを、すべての人が持ち合わせている行動特性（注意欠陥/多動スペクトラム）としてとらえ、この行動特性が強いために周囲との葛藤が生じている場合にADHDと診断されるという仮説を提唱した。このように基本特性と社会的適応を分けて考えることで、家族など環境との交互作用によって問題を把握できるとともに、自閉症スペクトラム障害との併存も理解しやすく、診断にとらわれず、複数の障害特性に応じた支援の方法を提供できる可能性がある。よって、本研究は、一般大学生のADHD特性に焦点をあてて検討する。

日本における一般大学生のADHD特性に関

する研究は、大学生に特化したADHD特性尺度がないため、診断項目や成人のADHD症状のチェックリストなどを用いて、大学におけるADHD的な行動特性の分類（篠田・篠田・橋本・高橋，2001；篠田・高橋，2003；高橋・篠田，2003）や自己評価による症状などの行動特性の強さと大学生活への適応の関係（遠矢，2002）について探索的に行われてきた。篠田・高橋（2003）は、DSM-IV-TRの診断項目やジョージア大学LDセンターでADHDのある大学生のアセスメントに使用されていたチェックリストの項目、症例研究における診断のあるADHD学生の行動特徴などを参考に、“大学生のAD（H）D特性チェックリスト”を作成し、全項目による因子分析を行い、ADHD傾向のある大学生の行動特性について、「不注意」、「多動性」、「衝動性」、「不安感」、「耐性の低さ」、「プランニング能力の低さ」の6因子で説明できることを示唆した。しかし、生涯を通して残存するADHD特性と状況や年代によって異なるADHDの状態像をまとめて検討したため、ADHD特性と大学時期のADHD特性による問題の関係を明確にできなかった。神経生物学的な特性であるADHD特性は生涯を通して大きな変化はないが、状況や年代によって異なった困難さや状態像を示すことが指摘されている（田中，2013）。ADHD特性が強くても、児童期に自分の弱点に対する対処法を学ぶことによって、青年期には大きな問題に到らない者もいれば、児童期までは問題なく過ごしたにもかかわらず大学入学後の状況の変化で困難に曝される者もいる。そこで、篠田（2008）は、“大学生のAD（H）D特性チェックリスト”（篠田・高橋，2003）の項目について、ADHD特性とADHD特性によって引き起こされる大学生活上の困難（以下、「大学生活上の困難」と略記する）の2つに分けて検討した。ADHD特性は、DSM-IV-TRの診断項目の生起頻度により「不注意」と「多動性・衝動性」の強さを把握するものである。DSM-IV-TRの診断基準によって診断された者は、CPT（持続的注意集中を客観的に評価する検査）や認知能力検査、脳波など客観的指標においても不注意や多動性・衝動性の特徴が指摘されていることから（斎藤・渡

部, 2008), ADHD特性の自己評定は一定程度の神経生物学的な行動特性を反映しているものと考えられた。一方, 大学生生活上の困難は, ADHDのある大学生が大学生活で起こしやすい問題に関する項目と Youth Self Report 日本語版ⁱ (倉本・上林・中田; 1999) や日本語版 Temperament and Character Inventory 短縮版ⁱⁱ (木島・齋藤・竹内・吉野・大野・加藤・北村, 1996) との相関分析により項目数を19項目に絞った尺度である。「不安」, 「プランニングの弱さ」, 「行動抑止の困難」の3因子から構成され, 一定の信頼性が確認されている (篠田, 2008)。「プランニングの弱さ」と「行動抑止の困難」は成人のADHDに特化した認知行動モデル (Safren et al., 2004) の補償方略の使用の失敗, 「不安」は精神的問題と考えられた。

そこで, 本研究は, 一般大学生のもつADHD特性が, 機能障害としての進路未決定におよぼす直接的な影響, また, 現在の大学生活における補償方略の使用の失敗や精神的問題など大学生活上の困難を介した間接的な影響について検討することを目的とする。Figure 1は本研究

の概念モデルである。

Ⅱ. 方法

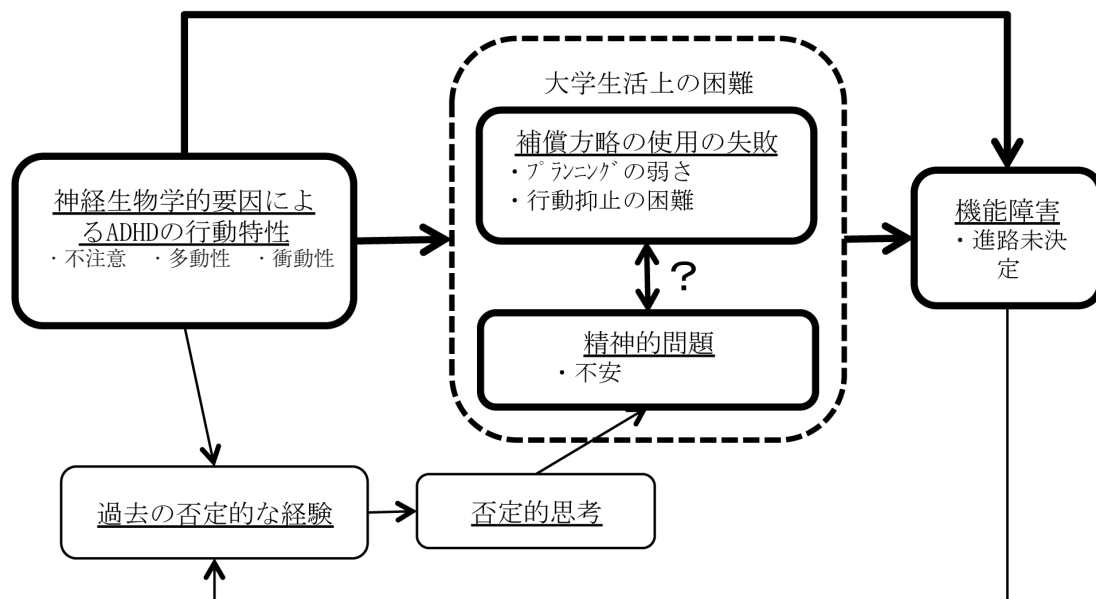
1. 調査対象者および実施時期

調査対象者は, 関西圏, 関東圏, 北海道の7つの国立および私立大学に通う文系の大学3年生248名を対象であり, 2008年7月に調査を実施した。

回答に不備のあった者と25歳を超える学生と社会人学生を除外した235名 (男性101名, 女性133名, 不明1名) を分析の対象とした。平均年齢は20.4歳 (SD=.72), 専攻は, 心理・福祉・教育系が7割, 社会・情報系が3割であった。

2. 実施手続き

調査への協力を依頼し協力をえられた教員の担当する授業前後に質問紙を配布し, 各人で記入後回収した。調査への協力は任意であること, 回答を拒否できることや回答を中断できることなどを書面および口頭で伝えた。



* 本研究では太字部分を検証する

Figure 1 本研究の概念モデル

「成人のADHDに特化した認知行動モデル (Safren, Sprich, Chulvick, & Otto, 2004)」を改変

3. 調査内容

(1) ADHD特性

ADHD特性は、DSM-IV-TR診断項目の「不注意」9項目と「多動性-衝動性」9項目をそのまま用いた。回答は、頻繁にある(4点)、しばしばある(3点)、たまにある(2点)、全くない(1点)の4件法で求めた。

(2) ADHD特性による大学生活上の困難

大学生活上の困難は、篠田(2008)の大学生活上の困難に関する19項目を使用した。下位尺度は、計画を立て遂行することの困難さ、行動の始発や継続して遂行することの苦手さを示す「プランニングの弱さ」、対人関係における行動抑制の苦手さを示す「行動抑止の困難」、漠然とした不安、不安全感を示す「不安」の3因子から構成されている。

回答は、頻繁にある(4点)、しばしばある(3点)、たまにある(2点)、全くない(1点)の4件法で求めた。

(3) 進路決定状況

進路決定状況尺度は、2度の予備調査を実施し作成した。

第1回予備調査は、2008年1~2月、都内私立大学の心理系学部の大学生108名(男性41名、女性63名、不明4名、平均年齢20.2歳、 $SD=1.51$)を対象に、職業未決定尺度(下山, 1986)を実施した。職業未決定尺度は日本の大学生を対象に、職業未決定状態にある大学生へのその後の援助の糸口となるような実践的側面を重視し作成されたものである。「未熟(7項目)」「混乱(8項目)」「猶予(7項目)」「模索(6項目)」「安直(7項目)」「決定(4項目)」の39項目から構成されており、「あてはまる」「どちらともいえない」「あてはまらない」の3件法で回答を求めた。下山(1986)と同じ手順で1986年の結果と比較したところ、因子の再現性が確認できなかった。そこで、39項目について因子分析(主因子法、オブリミン回転)を行い、共通性が著しく低い項目または、二重負荷の項目13項目を削除した。さらに、フリーターを選択する青年が一定数存在する社会状況であることを考慮し、職業意識に関する尺度

(下村, 2002)から「フリーター共感」4項目を加えた30項目について、「あてはまる」から「あてはまらない」の5件法で回答を求める質問紙を作成した。すべての項目の言葉遣い、適切性については、心理学専攻の教員2名および大学院生2名の検討を受け、妥当とされた。

第2回予備調査は、2008年4~6月、首都圏の国立・私立の3大学の心理系学部および教育学部系の大学生133名(男性40名、女性93名。平均年齢20.4歳($SD=.95$))を対象に、第1回予備調査で作成した質問紙を実施した。30項目について因子分析(主因子法、プロマックス回転)を行い、共通性が著しく低い項目または、二重負荷の項目4項目を削除した。解釈可能性から、26項目3因子構造を採用し、「回避」(8項目、 $\alpha=.82$)、「模索」(7項目、 $\alpha=.70$)、「職業決定不安」(11項目、 $\alpha=.84$)の3因子が確認された。対象者から一部の表現がわかりにくいという指摘があったため、心理学専攻の教員および大学生の検討を受け修正した。

(4) デモグラフィック

年齢、性別、大学名、学科、専攻などについて回答をもとめた。

Ⅲ. 結果

1. 尺度の検討

(1) ADHD特性

ADHD特性は、DSM-IV-TR診断基準に従い「不注意」9項目と「多動性-衝動性」9項目に含まれる項目の得点の加算平均をそれぞれの尺度得点とした。下位尺度ごとにCronbachの α 係数を算出したところ、「不注意」 $\alpha=.83$ ($M=2.29$, $SD=.60$)、「多動性-衝動性」 $\alpha=.79$ ($M=2.03$, $SD=.57$)と十分な値が得られた。

(2) 大学生活上の困難

大学生活上の困難19項目について因子分析(主因子法・プロマックス回転)を行った。共通性が著しく低い項目または、二重負荷の項目5項目を削除し、14項目で再度因子分析を行った結果、篠田(2008)とほぼ同様の「プランニングの弱さ」「不安」「行動抑止の困難」の3因子が確認された。因子負荷量.35を下回る項目は

なく、14項目の全分散を説明する割合は51.52%であった。下位尺度ごとにCronbachの α 係数を算出したところ、「プランニングの弱さ」 $\alpha = .76$ ($M=2.29$, $SD=.60$), 「不安」 $\alpha = .71$ ($M=2.03$, $SD=.57$), 「行動抑止の困難」 $\alpha = .75$ ($M=2.03$, $SD=.57$) と十分な値が得られたため、各下位尺度に含まれる項目の得点の加算平均をそれぞれの尺度得点とした。診断基準であるADHD特性と大学生生活上の困難とのPearsonの積率相関係数を求めたところ、全ての尺度間に中程度以上の正の相関が認められ、ADHD特性による大学における問題を十分反映しているといえた (Table 2)。

Table 2 ADHD特性と大学生生活上の困難の相関係数 (N=201)

		ADHD特性	
		不注意	多動性
大学生生活上の困難	プランニングの弱さ	.79 ***	.58 ***
	行動抑止の困難	.69 ***	.71 ***
	不安	.54 ***	.45 ***

*** $p < .001$

(3) 進路決定状況

進路決定状況26項目について因子分析 (主因子法・オブリンミン回転) を行った。予備調査の結果から当初3因子を想定していたが、固有値の減衰状況 (4.85, 2.88, 2.16, 1.58, 1.09, 0.90…), および解釈可能性から4因子構造が妥当であると考えられた。共通性が著しく低い項目または、二重負荷の項目4項目を分析から除外して再度因子分析を行った結果がTable 3である。なお、回転前の4因子で22項目の全分散を説明する割合は42.01%であった。

第1因子は、「自分の将来の職業について真剣に考えたことがない」、「職業のことは、もう少し後で考えるつもりだ」、「自分にとって職業につくことは、それほど重要なことではない」、「将来の職業については、考える意欲が全くわからない」など7項目からなり、進路決定について考える意思のない状態と考えられ「回避」と命名した。第2因子は、「これだと思ふ職業が見

つかるまで、じっくり探していくつもりだ」、「将来、やってみたい職業がいくつかあり、それらについていろいろ考えている」、「職業は決まっていなくても、今の関心を深めていけば職業につながってくると思う」など8項目からなり、実際に行動しているが最終決定できていない状態と考えられ「模索」と命名した。第3因子は、「職業決定のことを考えると、とても焦りを感じる」、「望む職業につけないのではと不安になる」、「将来の職業のことを考えると憂うつになる」など3項目からなり、決定しようとする意思はあるが不安で決定できず、行動に到らない状態と考えられ「焦燥」と命名した。第4因子は、「自分なりに考えた結果、最終的にひとつの職業を選んだ」、「自分のやりたい職業は決まっており、今はそれを実現していく段階である」、「自分の職業計画は、着実に進んでいると思う」など4項目からなり、現段階での最終決定を行い、行動に移している状態と考えられ「決定」と命名した。

下位尺度ごとにCronbachの α 係数を算出した結果、「回避」 $\alpha = .78$, 「模索」 $\alpha = .72$, 「焦燥」 $\alpha = .74$, 「決定」 $\alpha = .76$ という値が得られ、一定の内的整合性が確認されたため、各下位尺度に含まれる項目の得点の加算平均をそれぞれの尺度得点とした。各下位尺度の平均は、「回避」2.23 ($SD=.78$), 「模索」3.25 ($SD=.70$), 「焦燥」3.87 ($SD=.96$), 「決定」2.69 ($SD=1.00$) であった。

2. ADHD特性および大学生生活上の困難と進路決定状況との関連

ADHD特性および大学生生活上の困難と進路決定状況との関連を検討するため、観測変数間のPearsonの積率相関係数を求めた (Table 4)。

ADHD特性と進路決定状況では、「不注意」は「回避」「焦燥」と弱い正の相関、「決定」と弱い負の相関がみられた ($r=.30$, $p < .001$; $r=.25$, $p < .001$; $r=-.24$, $p < .001$)。また、「多動性-衝動性」は「回避」とのみ弱い正の相関がみられ ($r=.20$, $p < .01$)。

大学生生活上の困難と進路決定状況では、「プランニングの弱さ」は「回避」「焦燥」と弱い正

Table 3 因子分析の結果(進路決定状況)

(主因子法, オブリミン回転 N=211)					
項 目	F1	F2	F3	F4	
「回 避」($\alpha=.78$)					
自分の将来の職業について真剣に考えたことがない	.71	-.23	.06	-.24	
職業のことは、もう少し後で考えるつもりだ	.61	.18	.11	-.20	
自分にとって職業に就くことは、それほど重要なことではない	.61	.04	.22	.13	
将来の職業については、考える意欲が全くわからない	.59	-.02	-.22	-.18	
せっかく大学に入ったのだから、今の職業のことは考えたくない	.58	.13	-.08	.03	
自分を採用してくれる所なら、どのような職業でもよいと思っている	.44	-.10	-.08	-.14	
できることなら職業決定は、先に延ばし続けておきたい	.43	.11	-.33	.12	
「模 索」($\alpha=.72$)					
これだと思う職業が見つかるまで、じっくり探しいくつもりだ将来、やってみたい職業がいくつかあり、それらについていろいろ考えている	.10	.65	.18	-.25	
職業は決まっていないが、今の関心を深めていけば職業につながってくると思う	-.26	.60	-.03	.20	
職業を最終的に決定するのはまだ先のことであり、今はいろいろなことを経験してみる時期だと思う	.05	.55	.10	-.03	
ひとつの仕事にとどまらずいろいろ経験したい	.10	.48	-.07	.00	
若いうちは仕事よりも自分のやりたいことを優先したい	.09	.46	-.09	.22	
将来の職業については幾つかの職種に絞られてきたが、最終的にひとつに決められない	.33	.45	-.17	.22	
私は、あらゆるものになれるような気持ちになる時と、何にもなれないのではないかという気持ちになる時がある	-.17	.43	-.04	-.30	
「焦 燥」($\alpha=.74$)					
職業決定のことを考えると、とても焦りを感じる	-.04	.38	-.15	-.05	
望む職業につけないのではと不安になる	-.13	.05	-.76	-.17	
将来の職業のことを考えると憂うつになる	-.12	.04	-.68	.06	
「決 定」($\alpha=.76$)					
自分なりに考えた結果、最終的にひとつの職業を選んだ	.20	-.04	-.65	-.09	
自分のやりたい職業は決まっており、今はそれを実現していく段階である	-.03	-.09	-.01	.65	
自分の職業計画は、着実に進んでいると思う	-.22	.10	.10	.64	
自分の将来の職業については、何を基準にして考えてよいのかわからない	-.13	-.06	.28	.51	
	.26	-.05	-.33	-.40	
因子間相関					
I	I	II	III	IV	
II		.09	-.17	-.22	
III			-.19	.01	
IV				.19	

Table 4 進路決定とADHDの行動特性、大学生生活上の困難の相関係数 (N=211)

		ADHDの行動特性		ADHDの行動特性による 大学生生活上の困難			進路決定状況			
		不注意	多動性 衝動性	プランニン グの弱さ	行動抑止 の困難	不安	回避	焦燥	模索	決定
進 路 決 定 状 況	回避	.30***	.20**	.21**	.18*	.09	1.00			
	焦燥	.25***	.11	.25***	.11	.38***	.15*	1.00		
	模索	.10	.12	.06	.11	.15*	.28***	.26***	1.00	
	決定	-.24***	-.13	-.22**	-.07	-.18**	-.34***	-.37***	-.09	1.00

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

の相関、「決定」と弱い負の相関がみられた ($r = .21$, $p < .01$; $r = .25$, $p < .001$; $r = -.22$, $p < .001$)。「不安」は「焦燥」とのみ弱い正の相関がみられた ($r = .38$, $p < .001$)。「行動抑止の困難」はいずれの進路決定状況とも有意な相関はみられなかった。

3. ADHD特性が直接的、間接的に進路決定状況に与える影響

ADHD特性が大学生生活上の困難を介して進路決定に状態に与える影響を調べるために構造方程式モデルによって検討した。Figure 1の研究の枠組みに従い、進路決定の各変数について、ADHD特性が直接説明する経路と大学生生活上の困難を介する経路を仮定し、進路決定を従属変数、ADHD特性と大学生生活上の困難を独立

変数として階層的重回帰分析を行った (Table 5)。モデルⅠは、各進路決定を従属変数、「不安」を独立変数、モデルⅡは、「プランニングの弱さ」「行動抑止の困難」を独立変数に加え、モデルⅢではさらに「不注意」「多動性-衝動性」を独立変数に加えて検討した。

進路決定の各尺度について、決定係数の増分 (ΔR^2) から検討した結果、「回避」はモデルⅢ、「焦燥」と「模索」はモデルⅠ、「決定」はモデルⅡを採用し、全体のモデルを設定した。Amos18.0を用いて検討した結果がFigure 2である。適合度は $GFI = .94$, $AGFI = .90$, $CFI = .96$, $RMSEA = .08$ と十分な結果は得られたので、本モデルによる検討を行った。図中の数値は、標準化したパス係数および相関係数である。

「回避」は、ADHD特性の「不注意」からの

Table 5 進路決定状況を従属変数、ADHD特性、大学生生活上の困難を独立変数とした階層的重回帰分析の結果

(N=219)

従属変数	回 避			焦 燥			模 索			決 定		
独立変数/モデル	I	II	III	I	II	III	I	II	III	I	II	III
不 安	.09	-.07	-.12	.41***	.40***	.39***	.18**	.18*	.17*	-.20**	-.12	-.09
プランニングの弱さ		.21*	.00		.14	.05		-.07	-.13		-.24*	-.10
行動抑止の困難		.11	-.02		-.14	-.15		.09	.02		.10	.17
不注意			.39**			.21			.08			-.26*
多動性-衝動性			.01			.12			.08			.02
R ²	.01	.06**	.11***	.17***	.19***	.20***	.03**	.04*	.04	.04**	.07**	.09***
ΔR^2		.06**	.05**		.02	.01		.01	.01		.03*	.02

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

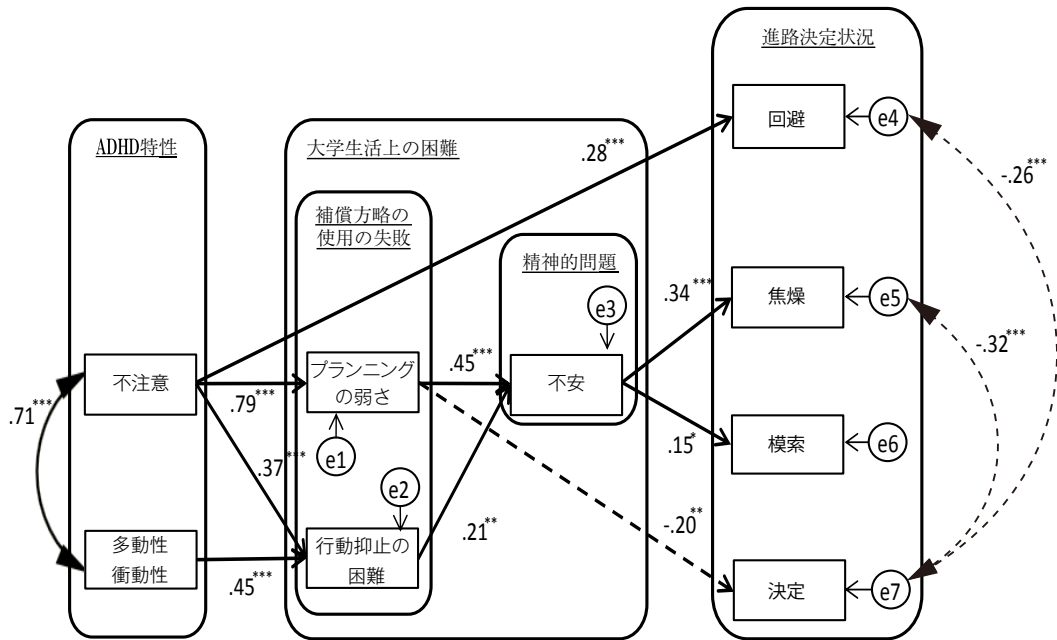


Figure 2 ADHD 特性, 大学生生活上の困難, 進路決定状況の関連

 $\chi^2 = 53.623$, $df = 24$, $p < .001$

モデル適合度: GFI=.94, AGFI=.90, CFI=.96, RMSEM=.08

有意なパスと係数のみ表示

直接的な正のパス (.29) のみが有意であり、現在の大学生生活上の困難からの影響は受けていなかった。「焦燥」と「模索」は、現在の精神的問題である「不安」からの正のパス (それぞれ, .37, .15) のみが有意であった。この「不安」は、ADHD特性に起因する「プランニングの弱さ」「行動抑止の困難」といった補償方略の使用の失敗に影響されており、ADHD特性が間接的に影響していると考えられた。「決定」は、「プランニングの弱さ」から負のパス (-.22) のみが有意であり、ADHD特性が現在の大学生生活上に引き起こす補償方略の使用の失敗が多いと決定が阻害されやすいことが明らかになった。

IV. 考察

本研究の目的は、ADHD特性が、直接もしくは大学生生活上の困難を介して、進路決定状況にどのような影響を与えるのか検討することであった。

1. 進路決定状況尺度

進路決定尺度に関しては、因子が安定しなかった理由は2つあると考えられる。ひとつは時代性の問題、もうひとつは対象者の問題である。まず、職業未決定尺度 (下山, 1986) の作成された時期は、バブルの崩壊する直前であったのに対し、本調査を行った2008年は、就職氷河期後で採用基準は緩和されたものの厳選採用の傾向にあり内定格差が表面化した時代である。よって、学生の意識も異なっており当然といえよう。職業未決定尺度 (下山, 1986) の因子が再現されないことは広瀬 (2011) も報告している。また、2回目の予備調査で新たに「焦燥」因子があらわれたのは、1回目の対象者が大学1, 2年生中心に対し、2回目の対象者が3年生であったためだと考えられる。3年生の7月、12月の就活解禁にむけて、さまざまな情報に触れる時期であることも背景にあると考えられた。

2. 進路決定状況に対するADHD特性の直接的、間接的影響

ADHD特性およびADHD特性に起因する大学生生活上の困難の進路決定に与える影響は、階層的重回帰分析の決定係数は0.2以下と非常に低かった。しかし、大学生の進路決定には個人的なものから社会情勢や雇用者側の事情など数多くの要因が指摘される中で、わずかでもADHD特性の影響が確認されたことは、ADHD特性も進路決定に影響を与える一要因として考慮される必要のあることを示すものといえよう。そこで、進路決定状況ごとにADHD特性の影響を検討した。

「回避」には「不注意」のみが直接影響を与えていた。成人のADHDの先延ばしの典型的な症状は、“未完了の課題を必要以上に重大に感じることで完了する自信をなくし、着手できないなどの理由から先延ばしにする”と計画性の弱さと自信のなさが影響するという指摘があるが(堀越, 2013), 本研究では、プランニングの弱さや不安からの影響は確認できなかった。一方、注意集中や注意の維持などが難しく目先のことに容易に気をとられる不注意の特性そのものが重要な決断の先延ばしに直接的に影響を与えていたことから、進路決定のリスク要因として不注意特性そのものが関連している可能性が示唆された。

「焦燥」および「模索」には、ADHD特性は直接的ではなく、「プランニングの弱さ」や「行動抑止の困難」に起因する「不安」を介して影響を与えていた。進路決定に際して、学生は大量の情報をタイムリーに処理しなければならない。目標をたてて必要な情報を収集、収集した情報を整理し必要な対処行動を決定、優先順位をつけて実行するといったプランニング力や、必要な情報を得るために企業の担当者や先輩などに連絡をとるなど注意深い対処能力が必要である。「不注意」や「多動性・衝動性」といったADHD特性が強いとこのような進路決定に必要なプランニングや対人的な行動抑止など補償方略の使用を失敗し「不安」が惹起すると考えられる。「不安」が高くなることで、思考および行動が停止している状態が「焦燥」、積極的に具体的な行動に移している状態が「模索」であ

るが、本研究では「模索」への影響はほとんど確認できなかった。これは、調査時期が大学3年生の7月であり、就職活動を開始し始めた時期であったため、多くの学生が「模索」の段階に達していなかったためADHD特性の影響がでなかった可能性も考えられる。一方、「焦燥」を引き起こす「不安」の背景に、ADHD特性に起因する補償方略の使用の失敗が影響を与えていたことから、ADHD特性の強い大学生に対して、適切な補償方略を獲得させ「不安」を軽減させることが有効な臨床的介入のひとつであることが示唆された。

「決定」には、わずかではあるが「プランニングの弱さ」が負の影響を与えていた。最終決断をする際には、複数の選択肢を吟味し、一定の条件に従って情報を収集したり、制限された時間の中で優先順位を考えながら意思決定をしなければならない。まさに、プランニングが必要とされる。「不注意」はプランニングに大きな影響を与えるため、「不注意」に対する対処法の獲得できなかった者にとって、決定までたどり着くことが困難であることが示唆された。

3. ADHD特性のある学生への進路決定支援

このように注意の問題を抱えている学生は、不安の強さによって進路決定状況も異なる。不安が低すぎて「回避」状態の学生、および、不安が高い「焦燥」状態の学生に対する支援について以下にまとめる。

まず、不注意の強い「回避」傾向の強い学生に対してどのように進路決定を意識づけるかである。「回避」傾向の強い学生は、自ら相談したり活動することはほとんどない。支援担当者が頭を悩ます“活動の立ち上がりが遅く就職課に足を運ばないなど、受身な学生たち(安達, 2004)”にあたる。注意に困難さがありながら危機感のない学生が、何の支援もなく継続的に進路決定に注意を向け続けることは至難の業といえよう。彼らを進路決定に動機づけるために、安達(2004)は、全ての学生を対象にした授業としてキャリア教育を扱う必要性を述べている。つまり、授業という強制的な枠の中で進路決定を意識化させ、集中して考えさせようとする方法である。一方、よりリスクの大きい学

生に対しては、入学まもない早期に不注意に関するスクリーニングを行い、リスクの強い学生に対して進路決定に関する心理教育的アプローチ（広瀬，2011）やADHDコーチング（Quinn et al., 2000 篠田・高橋（監訳），2011）を行うことも有効であると考えられる。

次に「焦燥」傾向の強い学生は、不安への対処が重要である。失敗を軽減させるスキルをつけること、失敗に対して過度に否定的な感情を持たないようにすることで不安を軽減させることが支援の鍵となる。近年、成人のADHDに対しても認知行動的アプローチによる治療がさかんになっているが、行動だけではなく認知を変容させることによって一定の効果をあげている（堀越，2013）。遠矢（2002）も行動コントロールスキルの獲得と同時に「情緒的な傷つき」の癒しの場を提供する必要性があると指摘しており、障害特性への配慮に加えて、情緒的な支援も重要である。

ADHDはセルフモニタリングが弱い（金沢，2013）ことから、自己評価だけではなく他者評価もえられるグループワークが有効である。「注意に焦点をあてたプランニングスキルアップワークショップ」では、積極的に自分の注意の特徴を意識化させ他者と比較することで、自己理解とスキルの獲得が促されると共に、他者に励まされることによって情緒安定が図られ、進路決定が促された（篠田・沢崎・石井，2013）。

V. 今後の課題

本研究では、成人のADHDに特化した認知行動モデル（Safre et al., 2004）における神経生物学的要因と現在の大学生活の問題にのみに焦点をあて、過去の問題には触れずに検討したため、「過去の否定的な経験」による精神的問題としての不安を把握するには不十分と考えられる。ADHDのある成人は、幼児期の頃から発達のおさまたげでつまづきを経験すると指摘されている（Safre et al., 2004；田中，2013）。この否定的な経験の繰り返しを変数として組み込むために、心理社会的発達課題の達成感を変数として組み込むこともひとつの手段であろう。また、本研究のモデルでは、補償方略の使

用の失敗から精神的問題にパスをひいたが、不安の強い学生が次々にインターシップを申し込んだ末、休む時間がなくなり疲れて学修に気持ちがはいるというケースもあることから（篠田他，2013）、精神的問題から補償方略の使用の失敗というパスも考えられるため、モデルの再考も必要である。

また、本研究で使用した進路決定状況尺度は、主に“進路を決定しようという意思”を測るものであった。進路決定は意思決定後、業種・職種・就職先の選択から具体的な就職活動の段階に入るが、不注意や多動性－衝動性といったADHD特性を持つ学生は、不注意に起因するプランニングの弱さによって実行が阻害されることも容易に推測できる。また、行動抑止の困難は面接などの場面でマイナスの影響を与えかねない。今後は、より具体的な場面でのADHD特性の影響を検討する必要もある。

さらに、「多動性－衝動性」に関しては、進路決定状況に全く影響を与えていなかったが、本当に影響を与えないのか、学齢期の行動特性が中心である尺度項目の問題なのか判断することはできない。DSM-5（American Psychiatric Association, 2013）が出版され、成人の項目が追加されたことから、尺度項目を見直した上で関係性を検討することも重要である。

このように尺度やモデルを精緻化し、就職活動の各場面で、ADHD特性がどのような影響を与えるのかを検討することは、進路決定の状況に応じた支援を準備する一助となろう。

【引用文献】

- American Psychiatric Association 2013
Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders, 5th Edition. Washington D.C.（高橋三郎・大野裕監訳 2014 DSM-5 精神疾患の診断・統計マニュアル新訂版 医学書院）
安達智子（2004）. 大学生のキャリア選択－その心理的背景と支援. 日本労働研究雑誌, 533, 27-37.
Barkley, R. A., & Murphy, K. R. (2006). Attention Deficit Hyperactivity Disorder: A Clinical Workbook. New York: Guilford.
独立行政法人日本学生支援機構（2014）. 平成25年度（2013年度）大学、短期大学及び高等専門学校

- 校における障害のある学生の修学支援に関する実態調査結果報告書 http://www.jasso.go.jp/tokubetsu_shien/documents/2013houkoku.pdf
- 広瀬香織 (2011). 大学生における進路不決断と実行注意制御の関連. 四天王寺大学紀要, **51**, 107-118.
- 堀越勝 (2013). 認知行動療法 (CBT) 樋口輝彦・斎藤万比古 (編) 成人期ADHD診療ガイドブック じほう pp. 111-117.
- 金沢潤一郎 (2013). ADHDに対する精神療法の考え方 樋口輝彦・斎藤万比古 (編) 成人期ADHD診療ガイドブック じほう pp.102-111.
- 木島伸彦・斎藤令衣・竹内美香・吉野相英・大野裕・加藤元一郎・北村俊則 (1996). Cloningerの気質と性格の7次元モデルおよび日本語版 Temperament and Character Inventory (TCI) 季刊精神科診断学, **7**, 379-399.
- 倉本英彦・上林靖子・中田洋二郎 (1999). Youth Self Report (YSR) 日本語版の標準化の試み—YSR問題因子尺度を中心に— 児童青年精神医学とその近接, **40**, 329-344.
- 文部科学省 (2005). 発達障害者支援法の施行について 17文科初第16号厚生労働省発障第0401008号 http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/06050816.htm
- 文部科学省 (2012). 障がいのある学生の修学支援に関する検討会報告 (第一次まとめ) について http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/24/12/1329295.htm
- 文部科学省 (2013). 学校基本調査 平成23年度以降 高等教育機関《報告書掲載集計》卒業後の状況調査 総括 <http://www.e-stat.go.jp/SG1/toukeidb/GH07010201Forward.do>
- Munafo, M.R., Yalcin, B., Willis-Owen, S.A., Flint, J. (2008). Association of the dopamine D4 receptor (DRD4) gene and approach-related personality traits: meta-analysis and new data. *Biological Psychiatry* **63** (2), 197-206.
- Norwalk K., Norvilitis J. M., & MacLean M.G. (2009). ADHD Symptomatology and Its Relationship to Factors Associated With College Adjustment. *Journal of Attention Disorders* **13**, 251-258
- 岡野高明・高梨靖子・宮下伯容・國井泰人・石川大道・増子博文・丹羽真一 (2004). 成人におけるADHD, 高機能広汎性発達障害など発達障害のパーソナリティ形成への影響—成人パーソナリティ障害との関連—. 精神科治療学, **19**, 433-442.
- Prevatt, F., Lampropoulos, G.K., Bowles, V. & Garrett, L. (2011). The Use of Between Session Assignments in ADHD Coaching With College Students. *Journal of Attention Disorders*, **15**, 18-27.
- Quinn P.O., Ratey N.A. & Maitland T.L (2000). Coaching College Students with AD/HD : issues and answers Advantage books, UC., Washington DC
- (クイン, P.O.・レイティ, N.A.・メイトランド, T.L. 篠田晴男・高橋知音 (監訳) ハリス淳子 (訳) (2011) ADHDコーチング 大学生生活を成功に導く援助技法 明石書店)
- Safren S.A., Sprich S., Chulvick S., & Otto M.W. (2004). Psychosocial treatments for adults with attention-deficit/hyperactivity disorder. *Psychiatric Clinics of North America* **27**, 349-360.
- 斎藤万比古・渡部京太 (編) (2008). 注意欠如・多動性障害—ADHD—の診断・治療ガイドライン じほう
- 下村英雄 (2002). 「フリーターの職業意識とその形成過程 —『やりたいこと』志向の虚実」小杉礼子編『自由の代償／フリーター—現代若者の就業意識と行動』労働政策研究・研修機構, 75-99.
- 下山晴彦 (1986). 大学生の職業未決定の研究. 教育心理学研究, **34**, 20-30.
- 篠田直子 (2008). 大学生のADHD特性が進路未決定に与える影響 目白大学修士論文 未公開
- 篠田直子・沢崎達夫・石井正博 (2013). 注意に困難さのある大学生への支援プログラム開発の試み 目白大学心理学研究, **9**, 91-105.
- 篠田直子・篠田晴男・橋本志保・高橋知音 (2001). 大学生におけるAD (H) D特性に関する基礎的検討 茨城大学教育実践研究, **20**, 213-226.
- 篠田直子・高橋知音 (2003). 大学生のAD (H) D特性とメンタルヘルスチェックリストの作成と特性に応じた支援の提案— 日本カウンセリング学会第36回大会発表論文集, 216-217.
- 高橋知音・篠田晴男 (2001). 大学生のためのADHD傾向チェックリストの作成 第10回日本LD学会大会発表論文集, 230-233.
- 田中康雄 (2013). ADHD患者に対する対応方法 樋口輝彦・斎藤万比古 (編) 成人期ADHD診療ガイドブック じほう pp.206-215
- 遠矢浩一 (2002). 不注意, 多動性, 衝動性傾向を認識する青年の心理・社会的不適応感 必要な

心理的サポートとは何か？ 心理臨床学研究

20 (4), 372-383.

Turnock, P., Rosen, L.A. & Kaminski, P. L. (1998). Differences in Academic Coping Strategies of College Students Who Self-Report High and Low Symptoms of Attention Deficit Hyperactivity Disorder. *Journal of College Student Development*, 39, 484-493.

Wolf L.E. (2001). College students with ADHD and other hidden disabilities. Outcomes and interventions. *Annals of the New York Academy of Sciences*, 931, 385-395.

【注】

i) YSRは、注意欠如・多動性障害-ADHD-診断・治療ガイドライン（斎藤・渡部，2008）にお

いて、ADHDの主症状を把握するために、11歳以上の子どもが自記入式で回答する評価尺度である。情緒や行動の問題を広範囲に把握するものであり、ADHDの診断や治療的介入の方針を立案するために有効と考えられている。「注意の問題」、「攻撃的問題」、「不安・抑うつ」などはADHDの主症状と関連が深いとされている。

ii) TCIは、クロニンジャーのパーソナリティ7次元モデルに基づいた自記入式の質問紙である。気質4次元、性格3次元で構成されているが、気質のひとつである「新奇性追及」はADHDと関連するドーパミンに関わる遺伝子との関連が指摘されている（Munafo, Yalcin, Willis-Owen, Flint., 2008）。

—2014年9.24.受稿，2014年12.5.受理—

Effects of ADHD traits on career decision-making of undergraduate students in Japan.

— Through difficulties of college life —

Naoko Shinoda
Tatsuo Sawazaki

Mejiro University, Graduate School of Psychology
Mejiro University, Faculty of Human Sciences

Mejiro Journal of Psychology, 2015 vol.11

[Abstract]

This study clarified the relationships between ADHD traits, difficulties in college life, and career decision-making. We have defined ADHD traits as awareness of inattention and hyperactivity/impulsivity through a self-reported questionnaire. A total of 235 third-year students were asked to complete questionnaires about ADHD traits, difficulties in college life, and career decision-making. Difficulties in college life comprised “weakness of planning” and “difficulty of behavioral inhibition” as lacks of skills, and “anxiety” as a problem of emotion. Career decision-making comprised “evasion,” “irritation,” “moratorium,” and “decision.” ADHD traits, difficulties in college life, and career decision-making were then examined using a structural equation model. “Evasion” was weak positive, which was directly influenced by “inattention.” “Irritation” and “moratorium” were weak positives, which were influenced by ADHD traits and “anxiety” caused by ADHD traits or lacks of skills. “Decision” was weak negative, which was influenced by “weakness of planning” caused by “inattention.” We suggested that “inattention” has hindered career decision-making, directly or indirectly.

keywords : ADHD traits, difficulties in college life, undergraduate students, career decision-making